

令和7年4月～令和8年3月 いきものガイドウォーク(全10回) 予定と実績

月	日	担当	観察内容	写真1	写真2	コース図
4	26	芳野光夫 善宝俊文	<p>開催日時：2025年4月26日（土） 10：00～11：04</p> <p>天候：曇り 参加者：18名（他に子供2名） テーマ：新緑と初夏の花 報告者：善宝俊文</p> <p>4月下旬にしてはやや肌寒い中での開催となった。1週間余り前の下見の時は咲いていなかったミズキは花を開いていたが、楽しみにしていたユリノキは蕾のままだった。</p> <p><観察したもの>フジ（ノダフジ。右巻きであること。まだ花はまばらだった。）。ヤマボウシの花。イチョウ並木の新葉（ジュラ紀からの生き残りであること）。トウカエデの花。ムクノキの花（樹皮の特徴）。エノキの実。ヤマザクラの巨木。ギョイコウ（御衣黄）。ハナミズキ。タケ（竹の秋。タケの成長。）。マツ（この時期の剪定の仕方）。ヒメウツギなど。</p>	 <p>ミズキ（ミズキ科ミズキ属） 山地に普通に生え、日当たりの良い沢沿いに多い。 名は、春先に枝を切ると水のような樹液が多量に流れ出すことから。 枝が幹から車輪状に出て、あまり斜上せず伸びるため、樹形は独特の階段状となる。成長が早いため、ときに街路樹や公園の緑陰樹として植栽されることも多い。材は細工しやすく、玩具や器、箸などに使われる。</p>	 <p>ユリノキ（モクレン科ユリノキ属） 北米原産。世界の温帯各地で広く栽培される。 現地では60mもの大木に成り、インディアンは昔これで丸木舟を作った。 日本には明治の初めに渡来し、街路樹などとして栽培される。高さ20m。5月、枝先にチューリップに似た黄緑色の花をつける。花弁の基部は明るい橙色。葉ははんでんのような形をしている。</p>	

令和7年4月～令和8年3月 いきものガイドウォーク(全10回) 予定と実績

月	日	担当	観察内容	写真1	写真2	コース図
5	24	河野満 桑原裕則	<p>開催日時 2025年5月24日(土) 10:00～11:15</p> <p>天候:曇り 参加者:12名 テーマ:植物と昆虫の関係 報告者:桑原裕則</p> <p>桑原のガイドデビュー戦のため12名全員の1グループでガイドを行った。1週間前の下見を行い日本庭園のスイレンやコウホネが見ごろであること、多くの樹種が実をつけていることなどを確認した。当日は、スタート地点付近にあるカワツザクラやヤマグワ、日本庭園のウグイスカグラの実が熟し始めており、鳥散布について解説した。桑原が担当予定していたヤグルマギクは下見で満開であったが、当日はほとんど刈り取られていた。園芸種を解説対象にすることの難しさを感じた。(参加者には数本残っていたヤグルマギクで解説した)</p> <p>モチノキの実にモチノキタネオナゴバチが出てきた痕跡があることからモチノキとモチノキタネオナゴバチの騙しあいについて解説した。</p> <p>〈観察したもの〉 カワツザクラ、ヤマグワ、スイレン、コウホネ、ウグイスカグラ、ヤマボウシ、ユリノキ、ヒマラヤスギ、モチノキ、ヒノキ、サワラ、オオバコ、ヤグルマギク、ネモフィラほか園芸種など</p>	 <p>スイレン <スイレン科 スイレン属> 多年生の浮葉植物であり、地下茎から根を張り、そこから長い葉柄が生じ、浮水葉が水面に浮かんでいる。花は地下茎から生じた長い花柄の先端に1個ずつつき、水面または水上へ抜け出て開花する。基本的に雌性先熟(雌しべと雄しべの成熟をずらして自家受粉を避ける)であるが、自家受粉を行うものもいる。夜間に開花する種は強い匂いを発し、ふつう発熱性であり、主に甲虫によって花粉媒介される。昼間に開花する種は主にハチ目やハエ目に花粉媒介される。</p>	 <p>ヤマボウシ <ミズキ科 ミズキ属> 初夏を代表する花木で、花びらのように白く見える総苞片をつけて花を咲かせる。開花は近縁のハナミズキより遅く、葉が完全に開いてから白い装飾花が多数つく。花弁に見える総苞は4枚ある。街路樹・庭園樹・公園樹としても用いられ、あまり大きくならないので庭木にも向いている。果実はサッカーボールに似た感じの球形で、9月ごろ赤く熟し食用になる。</p>	 <p>今日のガイドコースは・・・5月24日(土)</p>

令和7年4月～令和8年3月 いきものガイドウォーク(全10回) 予定と実績

月	日	担当	観察内容	写真1	写真2	コース図
6	28	渡辺英城 二宮靖男	<p>開催日時：2025年6月28日（土） 10：00～11：15 天候：晴</p> <p>参加者：15名（うち子供2名） テーマ：梅雨空を彩る花アジサイ 報告者：渡辺英城</p> <p>＜アジサイの系統＞ この前週まで梅雨空の日が続いていたが、この日は快晴、35℃の猛暑となった。コースはアジサイが多く見頃である日本庭園の彩翔亭に設定。高気温も予想されたので終了時間を11時目途とした。日陰のフジ棚において二宮氏のアジサイに関する説明の後、2班に分かれてガイドウォークスタート。彩翔亭を中心に植物等の観察を行い、各ガイドにて解説を行った。</p> <p>＜観察した主な動植物＞ トベラ、シャリンバイ、ウバメガシ、ネジバナ、キンシバイ、ビヨウヤナギ、リョウブ、アジサイ各種、スイレン、ハス、トクサ、タマリユウ、コクチナシ、ヤブレガサ、ヘクソカズラ、タブノキ、マヤラン（十数株）、セイヨウウツボグサ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、チュウゴクアミガサハゴロモ（外来種）など ※チュウゴクアミガサハゴロモ 新害虫として、埼玉県HPで県内茶畑で大発生、注意喚起との報。 航空公園に入る橋のたもとクワの実生木に成虫が多数みられました。</p>	  <p>学名Hydrangea（ハイドラングェア）は「水の器」の意。和名は集（あず）真藍（さあい） 別名は七変化、四葩（よひら）</p> <p>梅雨空を彩る花アジサイ（アジサイの系統） ○アジサイ（ホンアジサイ） 野生の基本形は「ガク型」、自然界ではまれに両性花が裝飾花に変化し、「てまり」になる。これを栽培普及したものがアジサイ。葉に光沢がある。別名テマリアジサイ。 ○ヒメアジサイ（マキノアジサイ） 明月院で有名なアジサイだが、各地の公園にも多い。涼やかな瑠璃色は明月院ブルーとも。葉に光沢はない。命名は牧野富太郎。ホンアジサイとエゾアジサイの交雑種との説がある。 ○ガクアジサイ（ハマアジサイ） 漢字で書くと「額紫陽花」。両性花の周りに咲く裝飾花を額縁に見立てたもの。アジサイのなかまの花姿は本種が基本タイプ。伊豆半島、伊豆諸島、三浦半島や房総の一部。四国足摺岬にも分布。海浜性植物特有の特徴、大型で、葉が厚く光沢がある。 ○ヤマアジサイ（サワアジサイ） 内陸の湿度がある山林に自生、小型で葉は薄く、光沢がないのが特徴。変異に幅、地域差大きく、花形、色合いなど魅力的な品種が多い。本州（関東以西）、四国、九州に分布。ベニガクアマチャなど多くの品種がある。</p>	   <p>公園などで見られるランのなかま ○ネジバナ（捩花） ラン科ネジバナ属。公園の芝地、街中なかでも見られるラン。5月～8月頃、花は螺旋状に咲く。捩れてピンクの螺旋階段のよう。個体によって右から、左から巻くもの、なかには捩れないものもあるから、巻き方の違いを探る観察も楽しい。ネジバナは芝生の菌類と共生、菌類が作った栄養分を吸収して成長する。花軸と子房に毛が多い。花は4～5cm、唇弁は白。ふつう5弁が淡紅色だが、白花品や緑花品もある。小さなハナバチが花粉を運ぶ「他花受粉」だが、温室などの環境では結実しないといわれる。 ＜その他＞ ○タブノキ（今果実が緑から黒熟する時期）タブの果実は同じクスノキ科のアボカドに似る。また有用植物としてのタブノキ（葉・樹皮）はタブ粉として線香の材になる。また、樹皮は黄八丈の樺色染色に用いられる。（コブナグサ（黄）、スダジイ（黒）とタブノキ（樺色）は黄八丈の三原色）</p>	

令和7年4月～令和8年3月 いきものガイドウォーク(全10回) 予定と実績

月	日	担当	観察内容	写真1	写真2	コース図	
9	27	二宮靖男 毛利英美子	<p>開催日時：2025年9月27日(土) 10:00～11:15</p> <p>天候：晴</p> <p>参加者：19名(うち子ども1名)</p> <p>テーマ：中秋に咲く花 熟す果実 跳梁する虫たち</p> <p>彼岸も明けてようやく凌ぎやすくなった航空公園。藤棚の下でヒガンバナとチュウゴクアミガサハゴロモについて概要を説明。道すがら用意した標本のカゼクサ、ネズミノオなど秋の風景を演出するイネ科植物について、その形状、名の由来などにも触れた。</p> <p>中秋の主演ヒガンバナ、シロバナマンジュシャゲはそろって首尾よく見られた。今、話題のチュウゴクアミガサハゴロモは白いロウ物質をまとった幼虫や黒っぽい体色の成虫が、園内の林縁、園路沿いの随所に見られた。</p> <p>終了後、ボランティアメンバーの情報で美しいマヤランが数株見られたのはラッキーであった。</p> <p>《観察した注目種》〈樹木〉サルスベリ、マテバシイ、ストローブマツ、〈草本〉イネ科植物：雑木林の林床に繁茂するササクサ、陽光をうけて美しいチカラシバ、路傍の楚々とした涼やかなカゼクサ、鼠の尻尾に見立てた鞭状の穂のネズミノオ、踏み込むとベタベタのひつつき虫のチヂミザサ、ツユクサ、ヤハズソウなど、〈昆虫類〉移入個体の特定外来生物アカボシゴマダラ、音叉で欺しの実験 ジョロウグモ(振動させた馬蹄形の音叉を網に触れると雌がさつと寄ってくる)一回で成功。</p>			<p>新害虫チュウゴクアミガサハゴロモ カメムシ目ハゴロモ科</p> <p>今、本州・四国・九州各地で大発生している。昨年9月、県内の茶園でもチャノキの徒長枝に白い綿のようなものが多く発生、確認された。茶園での被害は国内初であるとのことで、県農林部病虫害防除所は、令和6年10月31日、注意喚起の資料を発表した。このチュウゴクアミガサハゴロモは、6-11月頃出現する新参の帰化昆虫である。大きさ(翅端まで)は14mm前後、茶褐色～鉄錆色で、前翅前縁の中央部に白紋をもつ。よく似る在来種のアミガサハゴロモとの見分けは画像で対比すれば容易である。このチュウゴクアミガサハゴロモは、ブナ科、マメ科、ムクロジ科、モクセイ科、カバノキ科、クワ科など何でも吸汁する広食性の害虫で、今、都市部の公園や人家の庭などでもよく目にする新参の害虫として注目されている。</p>	

令和7年4月～令和8年3月 いきものガイドウォーク(全10回) 予定と実績

月	日	担当	観察内容	写真1	写真2	コース図
10	18	池田 河野 浩 満	<p>開催日時：2025年10月18日（土） 10：00～11：15</p> <p>天候：晴</p> <p>参加者：14名(うち子ども1名)</p> <p>テーマ：秋を告げる昆虫たち</p> <p>昆虫が得意な池田浩さんと、昆虫をテーマに公園をガイドしました。</p> <p>まず昆虫観察をする上で、注意する昆虫(スズメバチ・イラガ・カメムシなど)を説明。次にバッタ、キリギリス、コオロギの仲間の見分け方(触角の長短と翅のたたみ方)、そして蝶と蛾の分け方(触角の形状)を説明して出発。</p> <p>早速注意するカメムシ出現、カメムシ特有の臭いは腹側から出るので、触るときは背中側が良い。ジョロウグモは大きなメスの周りにオスが3匹、近づくとメスに食べられるので脱皮の時期を待って交尾するそう。お腹を触ると意外と固めで弾力がありスベスベだ。お腹から出ている糸を、子どもが持ってゆっくり下がってもらくと、2m以上切れなかった。</p> <p>その後子どもの見つけたバッタが、触角が短く翅が縦にたたまれているのでバッタの仲間と確認。ショウリョウバッタと似ているが脚が短いのでオンブバッタと確認。とても面白く学びを得られた観察会でした。</p> <p>他に観察した虫など：イモムシ、キンモクセイ、エノキ、ヤマトシジミ、アオスズメシ(鳴き声)、キツネノタイマツ、アキアカネ、クワゴ、ハラビロカマキリ</p>			
				<p>コノシメトンボ <トンボ目トンボ科></p> <p>赤トンボと呼ばれるものの多くはアカネ属のトンボであり、秋になると成熟した赤い色のトンボが群れている様子を見かけるようになる。体色の赤さは赤トンボの種類によっても違いがある。本種の成熟したオスは真っ赤になるが、メスは赤くはならない(写真はメス)。翅の先が褐色に色づくトンボには、コノシメトンボ、ノシメトンボ、リスアカネ、マユタテアカネ(メスの一部)がいて、胸部側面の模様などで区別することができる。トンボの仲間は止るときの姿勢と翅の開き方を観察することで種類の同定に役立つ。トンボ科は翅を開いて水平に止るが、イトトンボ科は翅を閉じて水平に止り、ヤンマ科は翅を開いてぶらさがるように垂直に止る。</p>	<p>アオマツムシ <バッタ目コオロギ科></p> <p>樹上性であることから市街地の街路樹でも増えており、特に夕方以降はリーリーーと大合唱が聞こえてくる。バッタの仲間にはバッタ科、キリギリス科、コオロギ科などがあり、触角の長さや翅の閉じ方で見分けることができる。コオロギ科は触角が長く、翅を上下に重ねて閉じる。本種は帰化種であるが、近年は昆虫の外来種が増えており、クズの葉っぱを食べるクズクビボソハムシや、他種植物につくチュウゴクアミガサハゴロモの他、エノキの葉っぱを幼虫の食草とするアカボシゴマダラなどである。アカボシゴマダラは特定外来生物に指定されており、飼育や移動、リリースも禁止されている。</p>	

令和7年4月～令和8年3月 いきものガイドウォーク(全10回) 予定と実績

月	日	担当	観察内容	写真1	写真2	コース図
11	22	久保雅春 桑原裕則	<p>開催日時：2025年11月22日（土） 10：00～11：10</p> <p>天候：晴 参加者：11名 テーマ：落葉広葉樹の冬支度</p> <p>テーマの冬支度は、特に紅葉の仕組みと冬芽、種子散布について解説を行った。当日は気候もよく紅葉も見ごろを迎え、とても気持ちの良い観察会になった。観察会では、久保さんが収集してある種子などのサンプルを提示しながら解説した。特にハチクの花のサンプルは、なかなか見られないため参加者も興味深く見ていた。ハクモクレンの毛で覆われた冬芽やトチノキのねばねばした冬芽を参加者に触ってもらい植物ごとの冬支度の違いを感じてもらった。最後は参加者全員でトウカエデの種子を飛ばした後、童謡「紅葉（もみじ）」を合唱して会を締めくくった。</p> <p>〈観察した植物〉 ピラカンサ、クワ、ハクモクレン、イロハカエデ、ヤマモミジ、モウソウチク、フクジュソウ、ハス、シナマンサク、ソヨゴ、ケヤキ、エノキ、コブシ、アキニレ、ムクノキ、ヘクソカズラ、サンゴジュ、モミジバズカケ、トチノキ、トウカエデ</p>	 <p>イロハカエデの紅葉と落葉の目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 水分の蒸散抑制と乾燥防止 葉をおとすことで水分の損失を抑え、乾燥による枯死を防ぐ。 落葉広葉樹の導管は針葉樹に比べて太く、内部の水分が凍結・融解を繰り返すと機能障害を起こしやすい。葉をなくすことで、導管内の水分の損失を抑え、凍結によるダメージを回避 栄養分の回収と再利用 落葉に先立ち、植物は葉に含まれるたんぱく質や無機塩類などの貴重な栄養分を幹や枝に移動させ、蓄える。紅葉はこの過程で葉緑体が分解され、他の色素（カロチノイドなど）が残る現象 不要な物質の排出 代謝の過程で生じた不要な老廃物や過剰なミネラルなどを葉に集め、落葉とともに体外へ排出。 	 <p>トチノキの冬芽の役割</p> <p>冬芽の主な役割は、春に新しい葉や花を芽吹かせる準備をすること、冬の厳しい寒さや乾燥から芽を守ること</p> <ol style="list-style-type: none"> 冬の保護 内部の組織を寒さ、乾燥、動物から守る。 翌春の準備 翌春に展開する葉や花芽をあらかじめ形成し、枝に格納 多様な保護戦略 <ul style="list-style-type: none"> ○毛皮のコート：モクレンのように、密な毛で覆われて寒さを防ぐ。 ○隙間風防止：トチノキのように、粘液や樹脂で冬芽を覆い、乾燥や虫の害を防ぐ。 ○重なる鱗片：ブナのように、多数の芽鱗が重なり合うことで、寒さから内部を保護 ○隠すタイプ：プラタナスのように、大きな葉柄が冬芽を帽子のように包みこんで保護 	

令和7年4月～令和8年3月 いきものガイドウォーク(全10回) 予定と実績

月	日	担当		観察内容	写真1	写真2	コース図
12	20	松本	毛利				
1	24	芳野	渡辺	テーマ：バードウォッチング			
2	28	久保	鈴木				
3	28	二宮	佐藤				